図画工作
美　術

問いをもち自分らしい表現を追求する図画工作･美術科学習
― 確かな願いをもち，思考の多様性の中で個を求める ―

1　図画工作・美術科における「問いをもち，主体的に追求する姿」

次の文章は，４年生が昨年度に取り組んだ題材，「ゆめのロボットをつくろう」８時間目における学習活動後の日記である。

> 今日，図工でゆめのロボットを作りました。わたしは2号目のロボットに手をつけようと思って，長いはこをセロハンテープで上と下につけてみたけど，はこが重くて，くっつきませんでした。わたしは，どうしたらくっつくかなどいろいろ考えました。けど，はこにあなをあけたら，ものを入れると出てしまうし，ガムテープでくっつけたら，茶色いからだめです。今度いい方ほうが見つかるといいです。
>
> （児童Ａ）

児童Ａは，素材体験をもとにして，作りたいものの色や形，表したいことと照らし合わせながら，よりふさわしい接合方法を試し，見つけようとしている様子がある。

図画工作・美術科における造形表現活動の中で，この例に見られる豊かな学びの姿を願う時，子どもが問いをもち追求する姿を次のように考えた。

> ○ 表現テーマに向かって願いをもち，自己の造形表現を高める姿。
> ○ 体験や他者との交流から表したいことを発展的に見いだす姿。
> ○ 題材を越えて，学んできた知識や技能を活用する姿。

一人一人が問いをもつとは，自分の考えの価値やよさを拠り所としたり，他者と共有した価値やよさに基づいたりして，自分の造形表現を問い直すことであると考える。そのためには，一人一人の子どもが，表したい事柄について確かな願いをもつこと。その上で，自己の造形表現の目的を達成するために，感性を働かせて自分や他者の造形表現や表現意図に問いかけを行うことが大切である。

追求する姿とは，見いだしたことや過去の経験や技能を駆使しながら，目的を達成するために新たな表現を獲得しようとする姿であると考える。

自分の取り組みをのよさを認め，他者から表現のよさを認められる中で，達成感を味わうという造形表現活動の中に見られる姿であると考える。

2　「問いをもち，主体的に追求する姿」を求めて

図画工作・美術科の授業の中で，子どもが問いもち追求する姿を求める時，子どもが，その時々に応じた学習動機をしっかりともつことが大切になると考える。学習場面の中で子どもが素材や表現テーマについて素朴な気付きをもち，素直な興味をもつ瞬間はたくさん見られる。しかし，自己の造形表現を追求するようになるまで，子どもの気付きの質を高めたり，学習動機にまで興味を高めたりする必要がある。そのためには，子どもが確かな願いをもち，問いを引き起こすことが大切である。問いが生まれるからよりよいものへ更新しようとする。質の高い気付きや興味が，学び合いの相互作用の関係の中で造形表現の質を高めると考える。

そこで，次のように問いをもち追求する姿につなげる手立てを考えた。

○ 造形表現の可能性を広げるために素材，技法などを吟味したり，表現テーマや表現意図に合致しているかなどについて検証したりできるように，新たな視点を示す。
○ 子どもの造形表現への願いを確かなものにするために，子どもの必要感に応じた「掘り下げる」「提案する」など教師のはたらきかけを行い，考えの根拠や理由を明らかにする。
○ 互いの考えを伝え合い，自らの考えや集団の考えを発展させるために，学び合いの視点や論点を明確にする。

子どもの追求意欲を支えることの一つに，子どもが自らの学びを自覚することが考えられる。子どもは，自分が表したいと考えていることについて漠然としたイメージを出発点としていることが多い。表現・鑑賞の領域を問わず，素材や技法と向き合ったり，発想や構想を図や絵，言葉にかき表したりすることで，イメージを具体化・具現化する過程をたどる。よりよい表現方法や発想を引き出すために，自分が表したいと考えていることを自分自身が明確につかむことが大切である。また，自分が表したいと考えていたことは本当にこれでよいのかなど，見直しを図ることが大切である。ふりかえりの機会を有効に働かせながら，自らの学びを自覚することが子どもの高い意欲を保ち，追求意欲を支えることにつながると考えられる。

学びの自覚をうながす前提として，造形表現への願いを確かにすることが大切であると考える。そのためには，子どもが表したいと考えていることについての発想や，その考えのもとになった根拠や理由を，子どもとともに明らかにしていく必要がある。図画工作の製作活動や美術科の制作活動の中では，考えていることが多少漠然としていても，作品としての形を成すことがあるため，“浅い”追求となってしまう。子どもが確かな願いをもつことで，自分の造形表現としっかりと表現意図をもって向き合うことができるので，子どもが必要感をもって追求し続けること，つまり，問いをもち追求することが可能になると考える。

学び合いの場面では，自らの考え（個人思考）と集団の考え（集団思考）をつなぐことにより，取り組みや表現のよさや価値が共有され，表したいと考えていたことがより明確になったり，新たな可能性が示されたりする。そこには子どもの問いがあり，よりよいものを求める願いがある。教師は，子どもの問いを刺激し，話し合いをゆさぶる共通の視点を示すためのはたらきかけを行うことができる（**図1**）。

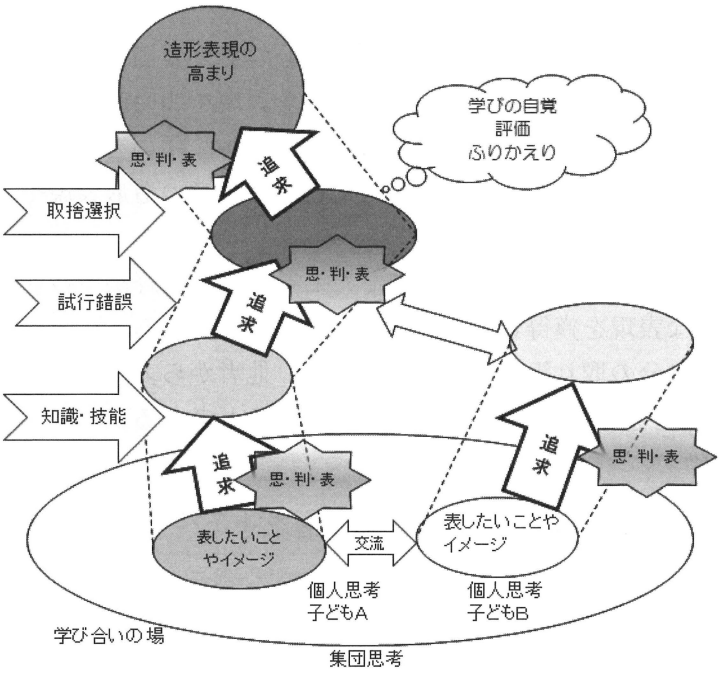

図1

題材の設定や単元の構成にあたっては，学び合うための意図的な場面を設定することで，他者の経験を追体験し，新たな気付きを獲得することが期待できる。

授業の中で教師のはたらきかけが有効に機能したり，授業そのものを見直し改善したりするために，子どもの姿を具体的な視点をもって教師がとらえるようにしたい。その視点は，教師が子どもの学びの姿や追求の様子をより深くとらえるためのものであり，子どもの考えが生まれる根拠や理由を明らかにするものである。

（文責　三桐　摂夫）